

◆書評 2 ◆

## 他称「犬好き」からみた人犬関係

### Human-dog relations viewed from who has been recognized as a “dog lover” by the surroundings since childhood

松本 朋華

MATSUMOTO TOMOKA

東京外国語大学大学院博士前期課程  
Tokyo University of Foreign Studies, master's student

キーワード

人と動物の関係 伴侶種 異種協働 ズーフイリア 観点主義

Keywords

human-animal relations; companion species; collabolation among multispecies; zoophilia; perspectivism

原稿受理日: 2020.1.31.

*Quadrante*, No.22 (2020), pp.125-128.

#### 目 次

1. 犬を愛する
2. 犬を生かす、あるいは殺す
3. 犬と向き合う

本書は、各分野の専門家や研究者だけでなく、犬好きの人間にとっても一読の価値のある本である。もっとも、私自身は幼い頃から常に犬と暮らしてきたため、自分が犬好きなのかどうかいまだにわからないし、「犬好き」を自称したこともない。実家が小動物の動物病院で、自宅がその二階にあるという環境で育った私は、犬が好きか嫌いかなど考える余地もなく、物心つく前から動物とそれを取り巻く人々に囲まれて育った。そして、紆余曲折を経て動物に関わる進路を選ばず、文化人類学の道を志したにもかかわらず、気付けば「野生のクマと人の交渉」などという主題で研究を行い、クマと意思疎通(?)を試みたりしていた<sup>1</sup>。このような背景があっただけで、犬を含む動物との関係に関しては、人一倍複雑な感情を持っている。

本稿では、私という個人が一読者として、また一応「犬好き」の一人として、受けた印象を率直に記述していきたい。

#### 1. 犬を愛する

我が家ではたくさんの犬を飼ってきた(次頁、図1)。彼らは捨て犬だったり、生まれすぎた子犬のうちの一頭だったり、足が3本だったりした。子供の頃、家に一人で留守番しているときなどは、犬(と猫と鳥)の世話でいつの間にか一日が終わっていた気がした。現在我が家では一頭のスタンダードプードルを飼っているのみだが、彼女は唯一ブリーダーから買ってきた「普通」の犬だ。今や私にとって、彼女はともに暮らす家族の一員である。

家族の行動は我が家の「末っ子」中心に決定されているといっても過言ではない。散歩は嫌だが庭で遊びたい、車に乗るときは助手席がいい、などと彼女が主張すれば大体聞き入れられる。しかし一方で、お出かけ中は彼女だけリード(散歩紐)を付けられ、犬不可の

<sup>1</sup> 松本朋華『「隣人」ヒグマと生きる——現代北海道の間寒別におけるヒグマと人との連続性——』北海道大学文学部文化人類学研究室2018年度卒業論文。





【図1】歴代の我が家の犬全員を取り上げたいところだが、紙幅の都合上代表してレオくん（当時12歳、2017年8月死去）を紹介する。家族で夕食を取るときは必ず一緒に座りたがり、卓上の食事をねだる訳でもなく横にびったりくっついていた。（2017年1月、筆者撮影）

場所では彼女だけ車で待機させられる。当たり前といってしまうとそれまでだが、どんなに家族と同じように扱っていると思っても、犬は犬として振る舞う範囲でしかその意思決定は尊重されず、家族に参加させてもらえない。

その矛盾に鋭く切り込んでくるのが、犬をパートナーとする人々、ズーの存在（濱野論文）である。彼らは犬を擬人化することもモノ扱いすることもなく犬として尊重しつつ、そのパーソナリティを認めるのだという。「あたかもまだ性の目覚めの無い人間の子どものように犬を扱い、犬の性的欲望に鈍感に振る舞う一般的な飼い主のありかた」（本書404頁）に疑問を呈する動物性愛者たちは、動物愛護の精神に基づき、犬を愛すべきパートナーとして尊重しようとする。「動物を苦しめるのは許されない、しかし動物のセクシュアリティを真剣に受け止めることは必要だ」（本書406-407頁）。動物性愛と耳にすれば、多くの人々は自分とは全く異質な世界の話だと思えるかもしれない。だがこの葛藤は他人事ではなく、私を含む犬を愛する人々、正しくは愛玩する人々にそのまま降りかかってくる問いである。ズーの人々

の語りは、「犬は家族の一員」と言いつつその存在を「幼いかわいらしい子ども像」に押し込めて都合の良い部分だけ家族扱いする我々の在り方に、深く突き刺さる。

思い返せば、性別や避妊・去勢手術の有無も関係なく、犬たちが性的な衝動を表す場面は何度も見てきた。にもかかわらず、ズーの人々の存在を知るまでそれらのことは私の中で「ないもの」とされていたのだ。実家の犬がクッションにマウンティングしても、家族の誰かが笑ってそれを取り上げ、それでおしまいだった。もっというと、ペットに避妊・去勢手術を施すことは飼い主の当然の責任で、ペットが幸せに生きるために必要なことだと疑いもしていなかった。しかし今は、「ペットを愛し、かわいがる」という我々のやり方が、傲慢でグロテスクな行為にさえみえてくる。ともすれば動物性愛に紐づけられがちなそれらのイメージが、いつの間にか反転してそのまま愛犬家の身に降りかかってくるのである。「人間こそが犬にとっての《愛情の寄生虫》なのである!」（本書450頁）というように、我々は異種間の愛というものを信じたいがゆえに、葛藤と醜悪さに目をつぶり、

犬を愛でるのかもしれない。

ズーの人々の動物に対する態度を知って、もうひとつ興味深く感じたことがある。ドイツという人権意識や動物愛護の意識が高い地域だからこそ、このような形でズーの思想が発展していったのだろうということだ。近現代の西欧に端を発し、今や当然守られるべき前提となった人権思想において、性愛は対等な他者間でのみ成り立ち、一方的で搾取的な性行為は暴力であるとされる。だから、小児性愛はセクシャル・マイノリティではなく子どもの人権侵害なのである。

では、ズーの人々と犬たちの関係性は対等な他者足りえるのだろうか。本章では直接言及されてはいないが、おそらく彼ら自身もそこに葛藤を抱えているように見受けられる。だからこそ、彼らはパートナーの動物達の要求を事細かにくみ取り、場合によっては性交渉は行わず、パートナーの性的なケアのみに留めることさえあるのではないか。

ここで再び我々に降りかかってくるのは、そもそも人間同士の関係性において、対等性は実現していたのだろうか、という疑問である。性行為は心身のごく個人的な部分をさらけ出すために、本当に両者の意思をすり合わせるためには、かえって複雑で高度なコミュニケーションを必要とすることになる。だから、性行為は両者の合意のもとに成り立つというのが前提だが、たとえ合意があっても心からそれを望んでいるのかは、また別の話である。実際、人間の女性がパートナーだった頃のセックスに息苦しさを感じていた男性が、犬のパートナーとのそれは「純粋な楽しみ」と感じられたという（本書404頁）。ズーの人々がそもそもマイノリティの立場に立たされ、ともすれば beasty や zoo-sadist とみなされかねない状況では、対等性やパーソナリティというものに対して、人間同士の関係性よりもより繊細な注意を払わざるを得なかったのかもしれない。そして、濱野が指摘するように、言語コミュニケーション

を通じて意思を伝えられない間柄だからこそ、より慎重に相手の意思をくみ取ろうとする関係性が築かれる。

本章は、我々が今までペットに向けていた愛情の正体を暴くのみならず、人間のセクシャリティやジェンダーの問題を問い直し、人と人の関係においてあいまいなまま目を背けていた部分にまで目を向けさせようとするのだ。

## 2. 犬を生かす、あるいは殺す

私の身の回りには飼い主からこれでもかと溺愛されながら生きている犬がたくさんいるが、同時に不遇な状況に置かれている犬も何度もみてきた。助けることができた犬も、そうでなかった犬もいる。だから、愛情を注がれない犬や暴力を受ける犬たちの話には自然と彼らの姿が重なり、どうしても心が痛んでしまう。

菅原論文で取り上げられた本多勝一のエピソードは、このような犬に対する感情と態度を再考するための重要な示唆となる（本書347-350頁）。新聞連載で描かれたエスキモーたちのそり犬を殴る蹴るという扱いに対して、当時批判が巻き起こったという。動物愛護の叫びを「都会のご婦人方の感傷」と呼び、犬という実存は「少年の最愛の友」になりうると対比する記述に関しては、いささかジェンダーバイアスのかかった表現ではないかと気になったが、ヒューマニズムと文化相対主義に照らし、フィールドの出来事をまず冷静に受け止める姿勢を提示した点には共感する。さらに、それにとどまらず倫理の対等性という観点から新たな方向を示したことは、フィールドワークを行う者にとって一つの指標となるだろう。

ここで、このエピソードをきっかけに、人類学徒の端くれとしても一つ疑問を提起したい。それは、なぜ犬を使役する人々は、犬が使い物にならなくなるほど殴ったり、時には死なせてしまうほどの扱いをしたりするのか、という疑問だ。序章を見返すと、本書全体に通底するキーワードとして「トレーニング」「コスト」「犬



の死」が挙げられている（本書17頁）。その中でも、特にコストの面については、様々な章で触れられている。例えば、近藤論文や北原論文では、北方先住民の犬ぞりに使われる犬について述べられている。荷物の運搬や人の移動に犬ぞりは重要な役割を果たしているものの、犬たちを飼いつけるための飼料確保には多大なコストがかかるという。大石論文に登場する狩猟採集民と猟犬の関係にも、同様の扱いがみられる。様々な投薬によって犬の能力の強化を試みたり、時に犬が人間の愛玩対象となったりする一方で、犬たちの死因の最たるものは人によるものだという。人に殺されてしまうまでの過程や背景は様々だが、犬の飼育にかかるコスト、あるいは愛情というコストを割きながら、なぜあっさりと犬たちを死なせてしまうのだろうか。犬を飼う人々、特に生存や生活の重要な部分を犬に頼っている人々の、一見整合性の取れないこのような行動は、生存戦略という観点からどのように説明できるのだろうか。

### 3. 犬と向き合う

本書のタイトルは『犬からみた人類史』である。「犬に関わるさまざまな分野・立場から浮き彫りにされる「犬のまなざし」を提示」（本書4頁）し、多様な試みが「犬による、犬のための犬自身による研究」（本書463頁）として一冊にまとめられている。結局、「犬からみた」とはどういうことだったのだろうか。犬の気持ちを全部知りたい、犬の目線を獲得したい、と犬好きなら一度は誰しもが抱く憧憬に、本書はどのように答えたのだろうか。

池田論文では池田自身があえて犬になって独白するという方法をとることで、犬のまなざしを獲得している。その独白は挑戦的な思考実験である一方、擬人化の域を超越して本当に「犬になれた」のかという点には疑問が残る。また近藤論文では、犬と人間の境界を揺るがすことの危険性から、犬に話かけることを

タブーとするアラスカ先住民の語りがとり上げられている。こちらはむしろ「犬になってしまう」おそれから、あえて溝を作ろうとしている例といえる。

本書全体を通して、話題の多様性に違わず、どのように「犬からみる」のか、方法もその是非さえも多様であり、一つの回答を用意するにははばかれるほどの犬と人の世界の広がりを感じた。

さて、ここまで「犬好き」として話を進めてきたものの、意外にも現代日本で最も典型的であろう「犬好き」と犬の関係性を中心に据えて論じた章はほとんど無い。加藤論文で言及されたペット葬の例は、わずかにそれに該当する。しかし、溝口論文、志村論文、大道論文で触れられているように、日本における犬への態度やまなざしも昔と現代とでは同じではなかった。このような背景のある日本で、現代の人と犬の関係がどう分析できるのか、これからどうなっていくのか、興味をそそられる。

しかしふと、これらの問いは、本書から我々読者へ投げかけられているのではないかと思ひ当たった。人類学は異文化や異世界を研究するものだととらえられがちだが、それだけではなく、他者という鏡を通して自分自身の姿をとらえ直すものである。本書で紹介されている犬と人間の関係性は、現代日本人の多くにとっては予想外の連続であったことだろう。この多様な関係性は、我々の姿をどのように映し出すのだろうか。本書は犬を通して人類史を捉えなおすことを試みた。我々は、本書の読書経験を通して我々自身をどのように見つめなおすのだろうか。これは、本書が我々「犬好き」に突きつけている挑戦状なのだ。